

保育カンファレンスにおける保育者の専門性向上に関する研究(2) —保育者の専門性向上を促す要因に着目して—

○小松和佳(広島大学大学院)

井上 弥(広島大学)

キーワード: 保育者の専門性, 保育カンファレンス, 言葉の相互共有

問題と目的

児童期以降の子どもの発達と学びの基盤となる幼児期の教育において、子どもと直接かかわる保育者の専門性向上は、重要な課題とされている。保育者の専門性向上の要因の1つとして保育実践の振り返り(秋田, 2013)が挙げられ、その方法として保育カンファレンスが着目されている(汐見, 2015)。

小松(2019)は、保育カンファレンスにおける保育者の専門性向上では、保育者が言葉の相互共有を行い、自身の保育の枠組みを捉え直すというプロセスが必要であることを明らかにした。また、保育カンファレンスの中で、保育者が、自身の課題や悩みを開示し、他の保育者へ問いかけること、共感的に受け止められたと捉えることができるように、保育者自身の経験を踏まえた上で問いかけ、提案を行うことという2つの要因が、保育者の専門性向上要因となることを示した。保育者の専門性向上が課題とされる中、小松(2019)が示した2つの要因をより実際の保育カンファレンスの場で汎用させることが重要であると考えられる。そこで、本研究は、2つの要因を踏まえた保育カンファレンスを実施し、保育者の専門性向上プロセスを検証することを目的とする。

方 法

調査協力者 A幼稚園で行われた2回の保育カンファレンスに参加した保育者6名(保育経験年数20.33年, SD=13.63)。

手続き 日本版SICS(秋田他, 2010)を活用した2回の保育カンファレンスは、小松(2019)が実施した保育カンファレンスと同様の手続きで行われた。また、第2回保育カンファレンス(以下、第2回と記す。第1回保育カンファレンスについても同様に、第1回と記す。)については、保育者の専門性向上の2つの要因を踏まえた保育カンファレンスを実施するため、以下の手続きを加えた。まず、第2回実施前に、保育者に対して、2つの要因となる具体的な発話についての説明を行い、これらの発話を積極的に言うよう促した。また、筆者は、進行係として、2つの要因となる具体的な発話が促されるよう進行を行った。なお、各保育カンファレンスにおけるエピソードについては、保育者A(経験年数4年)のクラスである4歳児を対象としたものである。

結果と考察

2回の保育カンファレンス逐語記録から、保育者が言葉の相互共有を行った18事例を抽出し、そのうち、保育の枠組みを捉え直した9事例を分析対象とした。これら9事例について、各保育カンファレ

ンスにおける保育者の専門性向上プロセスを比較検証した。Table1は、各保育カンファレンスにおける保育者の言葉の相互共有事例数、保育の枠組みを捉え直した事例数及び保育者の専門性向上の要因となる発話数である。

Table 1 保育カンファレンスの事例数及び発話数

	言葉の相互共有事例数	保育の枠組み捉え直し事例数	保育者の専門性向上を促す発話内容		
			課題や悩みの開示	問いかけ	提案
第1回	6	2	2	0	6
第2回	12	7	7	11	6
合計	18	9	9	11	12

第1回における保育の枠組みの捉え直し2事例は、保育者が、相互共有した他の保育者の言葉をきっかけに保育の枠組みを捉え直し、保育者の専門性を向上させた事例であった。第2回における保育の枠組みの捉え直し7事例の中3事例は、第1回事例と同様に、保育者が相互共有した他の保育者の言葉をきっかけに保育の枠組みを捉え直し、保育者の専門性を向上させた事例であった。第2回における他の4事例は、エピソード提供者である保育者Aが、他の保育者からの自身への提案の発話を相互共有することにより、保育の枠組みを捉え直し、保育者の専門性を向上させた事例であった。一方、第1回においても、保育者Aへの提案の発話は見られた。しかし、他の保育者から提案された発話を保育者Aが相互共有したものの、保育の枠組みを捉え直すには至らなかった。

そこで、第2回における保育者Aの専門性向上プロセスを検討した結果、他の保育者は、保育者Aに対して、「そういうところ普段からどう。」「そうだね、実際。」等、問いかける発話を行っていた。また、「でも、瞬時に判断するのは難しい。」と、子どもへの対応の難しさを出す発話を行ったり、「そうそう、そこなんです。」と、相槌をしたり、「もって、〇〇先生(保育者A)から学ばないかんかかって思うところがあるがで。」と、保育者Aの保育実践を認める発話を行ったりしていた。これらの発話を受けた保育者Aは、自身の課題や戸惑いの気持ちを開示した後、自身への提案の発話を相互共有することにより、保育の枠組みを捉え直すことを通して保育者の専門性を向上させていた。

これらのことから、本研究が実施した保育カンファレンスにおける他の保育者への問いかけや、保育者自身の課題の開示、また、共感的な言葉がけは、保育者同士の言葉の相互共有の契機となり、保育者の保育の枠組みの捉え直しを促すことが示されたと考えられる。